

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

* 私のアマルコルド（後編） *

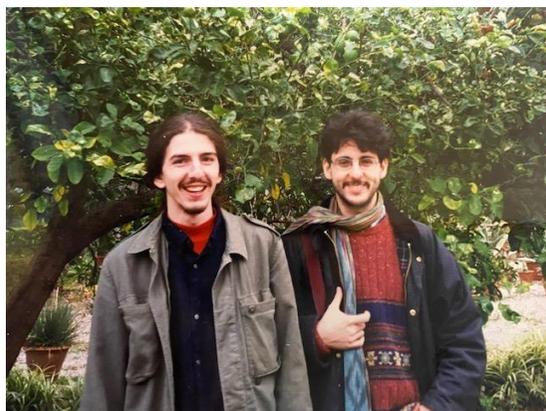
～ イタリアでのサバティカル ～

いり はるひこ
入 治彦

●日本人の色理解

ボローニャ大学に入ってから、例の記号論を初め、新約聖書学、ダンテの神曲、文化人類学などの授業を受けた。日常会話はある程度は通じるようになってきたとはいえ、大学の授業は相変わらず難しかった。ところが、記号論の授業の時、ウンベルト・エーコの一番弟子のパトリーツィア・ヴィオリ先生が授業の中で「日本人の色理解」という話を始めた。これは日本人の私にはピンとくる話だった。「日本人の色理解についてですが、日本人の色のバリエーションは少ないです」と言い出した。何を言っているのだらうと思ったとたん、300人くらいの大教室にブーイングが起こった。日本最頂の学生たち案外多いじゃないかと思った。その後、先生は「日本語には hidori という色があります。hidori は ao を含みます。ヴェルデがブルーを含みます」と説明されたので、これはおかしいなと思った。ただ授業中にその間違いを指摘しても、質問を返されたら、即座に説明するのは難しい。そこで、講義終了後、先生のところへ言って、図解して説明した。「先生、日本ではたしかに昔の人たちは色を単純化して、私の祖母なども茶色のことを赤と言ったりしていました。でも、日本の職人の人たちは、何千もの色の種類を使っています。決して日本人の色のバリエーションは少なくありません。それから、先生が言われた hidori という色はありません。hidori ではなくヴェルデは midori です。そして、緑が青を含むのではなく、

青が緑を含みます」こんな風に説明した。先生はとてもシンプティカな方でちゃんと受け止めてくださった。「でも、これを教えてくれたのは〇〇先生なんだけど」ともおっしゃっておられた。そういえば、私もこの手の翻訳でおかしな日本語を見たことがあった。



【パレルモの植物園 ヴィンチェンツォ(左)とマッシモ】

●ヤクザとマフィア

その1週間後の2時間の授業の最初に先生は「先週日本人の方から日本人の色理解でこんな指摘を受けました。」と言って10分くらい使って先ほどの説明をプロジェクターに図解して説明してくださった。その丁寧な対応には本当に頭が下がった。そして、「これでいいですか、日本人の留学生の方？」と一番後ろの席に座っていた私に答えを求めたので、その時には「Esatto!」と大きな声で

答えた。その途端、大教室が拍手の嵐となった。私は先生に深く感謝した。授業が終わってから 20 人くらいの学生たちが私を取り囲み、親しくしていたデンマーク人の留学生は「Grande successo!」と声をかけてくれた。それに続いて、イタリア人の女子学生が「私は日本語を知っています。1 から 20 まで数えられます。空手を習っていたから」と言った。その後によってきたマッシモという学生は私に「日本のどこからやってきたのか?」と尋ねるので「神戸のそばからやってきた」と答えた。「それじゃ『ヤクザ』か?」というので、「そんなようなものだ」と答えると「ぼくたちはシチリアからやってきたマフィアだ」と冗談を言い、ヤクザとマフィアで仲良くしようということで握手を交わした。彼と同じくパレルモ出身のヴィンチェンツォとも親しくなった。この二人には後で「どん兵衛」を食べさせ、「スパゲッティとは違い、これは音を出して食べないと粋の良さが出ないのだ」などと教えてやった。マッシモはもともと日本竝頂で、ルパン 3 世だとか、ポケモン、宇宙戦艦ヤマトなどアニメもよく知っていたし、私が学生の頃に合唱団で歌い、コロムビア・レコードから出た『合唱組曲宇宙戦艦ヤマト』のカセットをあげたら、とても喜んで大晦日の頃パレルモに遊びに来てくれと声をかけてくれた。

パレルモにはナポリから船で渡った。大きな船ではあったが、12 月 30 日だったためか、客はほとんど見当たらず 10 人くらいしかいなかった。そこで知り合ったイタリア人、不動産業の若い男性と中学校で国語を教えている教師の女性とは夜を徹して文化論を交わした。彼女は「パレルモに着いたら、必ずアランチーナとカンノーリを食べなさい。絶対美味しいから」と教えてくれた。

パレルモの夜はルミナリエの起源ともいべきアラベスクというか、天使の形やクリスマスのシンボルや緑と赤のイルミネーションが素朴に輝いていた。次の日の大晦日にはカウントダウンで花火が打ち上げられていた。マッシモとヴィンチェンツォは、夜間私を呼び出したかと思うと、10 人位の友達と一緒に車 2 台でこれからジェラートツアーだとか言って、ジェラートを食べながら、天井がない朽ち果てた古い教会やら遺蹟を案内してくれた。また、マッシモは、タヴィアーニ兄弟の映画『カオス・シチリア物語』というオムニバスの最初に出て

くるセジェスタの神殿や『ニュー・シネマ・パラダイス』のロケにも使われた場所なども車で連れて行ってくれた。

●ポローニャのメソジスト教会

ポローニャでは、教会は私の属している日本基督教団のリベラルな会衆派に近いメソジスト教会に通った。はじめ日本人で牧師と言っても信じてもらえなかった。得体の知れない人間かと思われたかも知れない。身分証明書でも作ってきたらよかったかなとも思った。ただ讚美歌を歌っていた時、隣にいたイタリア人女性が「讚美歌をきれいに歌いますね」と言って褒めてくれた。その後の食事会に残って私は、いわゆる 1960 年代に日本でも流行ったボビー・ソロの「ほほにかかる涙」であるとか、ミーナの「砂に消えた涙」、ジリオラ・チンクエッティの「雨」などを歌い出したら、10 人位のおじ様たちが懐かしかったのか、調子に乗って歌い出し、大合唱になってしまった。ところが、先に私の声を褒めてくださった女性がやってきて「ブルッタ・フィーネ」と言って怒ったような顔をして立ち去って行ってしまった。教会で恋だの愛だのはだめ、神にのみ栄光だったので御法度だったのかとも思った。

ある時、アンツィアーニ牧師から頼まれて礼拝で「主の祈り」(La preghiera del Signore)を日本語で祈ってくれと頼まれて、講壇で祈った。終わってから「ほとんどわからなかった」と言われ、「日本、韓国、中国はインド・ヨーロッパ語族ではない全然違う言葉なので無理です」と答えた。また、そろそろ日本に帰国することになった 2 月には、教会から証しと夕食の会で Testimonianza をするように頼まれた。どうしてクリスチャンになったのか、なぜ牧師になったのかと言ったことを話す機会を与えられた。私が原稿を書き上げた後、親しくなった教会役員のプロッコリさん(野菜と同じ名前で笑えてくる)が丁寧に精査してくださった。その会では 15 分ほどイタリア語で証しをした。「よくわかる話だった」「私も同じような経験をしてきた」とか色々みんなコメントを語ってくれた。「妻の具合が良くないので、1ヶ月早めて帰国します」ということも含めて話したところ、ブラジル人やエリトリア人の女性たちは半泣きで「お連れ合いのこと

祈っています」と励ましてくれた。

●ホームステイ先の家族

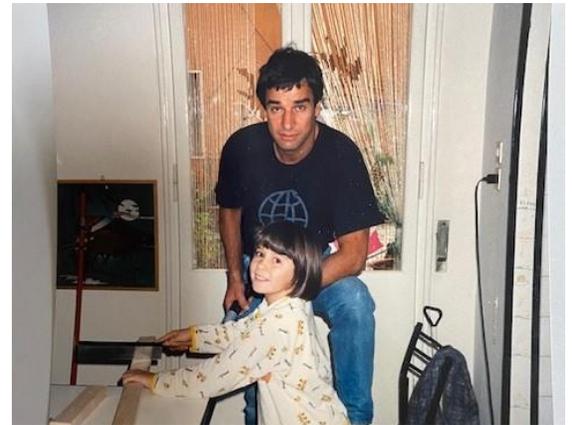
最後にポーロニャでのホームステイ先の親子ジジとルルについて書いておこう。私は大学に通いながら語学学校にも通っていたため、語学学校がホームステイ先を用意してくれた。それがジジの家だった。ジジは高校の倫理社会の先生をしていた。ルルはその娘で当時小学3年生だった。ジジは妻と離婚していた。彼は教育者だったためか、色々と気遣ってくれた。「ぼくの名前はジジだけど、日本語ではおじいさんのことだろう」とか、よく自虐ネタを使って笑わせていた。彼は、高校の教え子たちの同窓会を計画し、ポーロニャ郊外のアグリトゥリズムに連れて行ってくれたことがある。農家で畑仕事をしながらそのレストランで食事し寝泊まりもするのだろうけれど、その時は日帰りで行った。イノシシの肉やウサギの肉も食べた。ルルは頭のいい子だったが、お母さんがいなくなつてふてくされているところがあった。

私は教会関係者の家にもよく食事に招かれ、その家の子どもたちとも仲良く遊び、紙ヒコーキを作ってあげたり、私の一芸で両耳を動かしたりすると、帰りには子どもたちが寂しくなつて「帰らないで」とか言って泣き出したりする子たちもいた。でも、ルルはそう簡単ではなかった。ジジが夜遅くまで外出するので、ルルを寝かしつけてやってほしいと言われたことがあった。そこで『クリスマスの星』というトゲトゲでいじめられっ子だったヤマアラシの子どもがページェント(聖誕劇)の最後で大ピンチを救うという絵本を思い出して、イタリア語で子守唄がわりに話してやったこともある。でも、私には何かとツッコミを入れてくる子だった。それで最後の別れ際、「ぼくが一番恥ずかしい話を告白するね」と言って「実はぼくは、小学校の4年生までおねしょをしていたんだ」と話した。その途端、彼女は嬉しくなつて私の肩に自分から肩車をしてきたのでびっくりしてしまった。

●27年後の今

あれから23年が経ち、私もジジも引越して長らく途絶えていた通信がFacebookで4年前繋がることになった。私はFacebookはしていなかつ

たけれども、コロナで礼拝のライブ配信を教会がするようになったことで、遅ればせながら始めたところ、ジジの名前を入れたら、繋がりに、ルルとも通信ができるようになった。ルルはポーロニャ大学法学部の大学院を卒業し、司法試験にも合格し、判事として活躍をはじめていた。ジジは仕事を引退して、今はFacebookとNetflixばかりやっているといていた。ところが、それから1年後ルルからジジが亡くなった連絡が入った。なぜ亡くなったのか、ルルはその悲しみをFacebookに詩的に訴えていたが、原因は一向にわからないし、そつとしておしくなく、慰めの祈りを送った。今でもルルとはお互いに誕生日のお祝いやFacebookにコメントは書いている。



【ジジとルル】

京都の教会では、2024年のイースターに京都大学で教員をしている女性が洗礼を受けた。親子で子どもの教会や大人の礼拝に出席している女性だったが、その幼稚園児のお子さんはイタリア人のお父さんと日本人のお母さんのミックスだ。名前は日本名だが、顔はイタリア人そのものbelloだ。私と会うと向こうからイタリア人の発声でCiaoと挨拶をしてくる。お互い簡単なイタリア語を使って話していた。私は今年の2月から神戸近くの以前働いたことのある三木市の教会に転勤になったが、引越しの日親子で見送りに来てくれた。Ciao君は神様が京都で最後に送ってくれたプレゼントだと密かに思っている。

(日本基督教団牧師、当館受講生)

* ローマで双子育児⑳ *

浅田 朋子

双子の娘たちは、今年の6月で小学校を卒業し、9月から「La scuola secondaria di primo grado (中学校)」に行く。なんと時の経つのは早いことか…。

イタリアの義務教育は、6～16歳の10年間である。小学校は6歳で入学し5年間、中学は3年間、高校は5年間となっている。公立の幼稚園から高校では、1月の上旬～中旬にオンラインで希望の学校へ申し込みをする。私が日本で小・中学生だった頃は地域制で、学校を選択するということはできなかった。ローマ市でも原則は住民票のある地域に申し込むが、保護者の勤務地近くや、送迎が義務であることが理由に「祖父母の家のそば」の学校を選ぶことができる。

ローマでは、公立の学校であっても各学校で授業内容や先生のレベルがかなり異なるので、親は学校の情報を集め、早い段階から学校選びをする。11月頃から各学校でオープンスクールや学校説明会が行われ、この時期になると5年生の親たちの話題は「どこの学校へ見学に行くか」が中心になってくる。双子のクラスの親たちも「ねえ、ねえ、どこに行く予定？」とみんな探りを入れ始め、親たちの終わることなき学校選びが始まるのである。

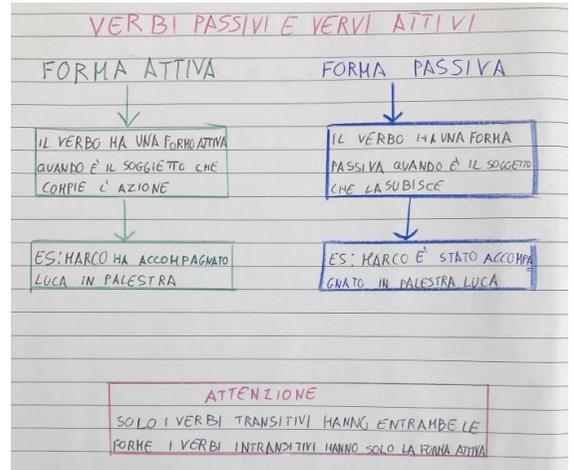
私たちが気になる学校の情報を集め、通学のしやすさ、そして評判の良さから2校に絞った。

1校は、家から車で5分、地下鉄で1駅のA校。歴史のある地域にある落ち着いた雰囲気のある学校で、先生の評判も良く、課外学習も盛らしい。

もう1校のB校は義父母が住む隣の区域にあり、私たちの自宅からもそう遠くない。義父母の家からだと歩いて5分、ととても近い。イタリアでは14歳未満の子どもの放置を禁止する法律があり、これに則り学校への送迎も14歳を超えるまで必須となっている。私が迎えに行けない場合は義父母が迎えに行くので、義父母宅に近いこの学校も候補にした。

しかしこのB校、最近少し評判は上がってきたものの、過去は相当荒れた中学だったらしい。夫

の世代では過去のイメージが根強く残っていて、良い印象を持っている人はあまりいない。クラスでも、このB校が近いので通わせようかと考えている親が何人かいる。同じクラスのエレナちゃんのお姉ちゃんがこのB校に通っているの、大学教授をしているお父さんにクラスのママたちが意見を聞きに集まった。大学教授という肩書きからも、なかなかいいアドバイスが聞けるのではないかと思ったのだ。「どうなの、B校は!？」と尋ねると、のんびり我が道を行くこのお父さん「まあ、うちの子は楽しんで通ってますよ」と笑う。「先生はどんな感じ?」と聞かれても「まあ、いいんじゃないですかねえ。公立校なんてのは、どこも一緒ですよ」と気の無い返事。一人のママはこの返答に不服だったのか「あの人、ほんとに大学教授なの?!頼りないわあ! ぜーんぜん役立つ情報がない! もうオープンスクールで決めるわ!」とため息をついた。

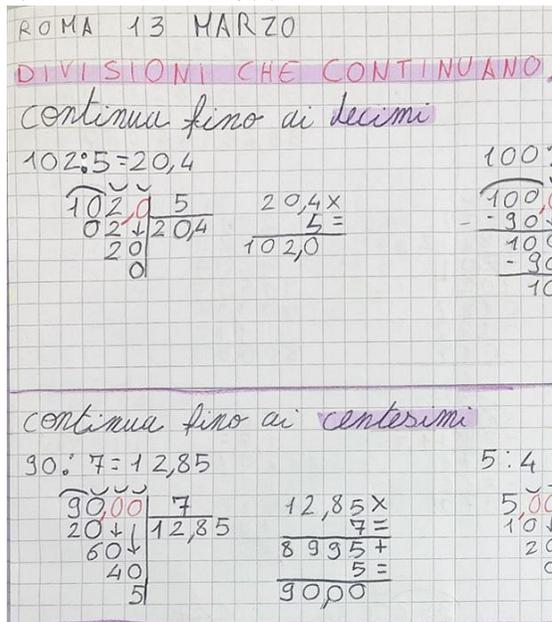


【イタリア語のノート(受動態と能動態)】

さて、12月。この2校の学校のオープンスクールが行われるので、双子も連れ、家族みんなで参加することにした。土曜日の午前9時にA校、11時にB校の予約が取れた。

当日、まずはA校からである。早く着いたが、校舎に入るともう何人かの家族が待っていた。双子は初めての場所なので緊張した面持ちである。学校の建物は重厚な雰囲気では私には気に入ったが、双子は「暗い感じ…」とあまり好きではなさそう。エントランスに参加者が揃うと、広い会議室に通されすぐに説明会が始まった。60代前半のきちんとスーツを着た校長先生は真面目そうな表情で「本校は生徒の個々の学習スピードに寄り添い、教師がそれぞれにあった方法でサポートします。ま

た生徒同士でも助け教え合い、みんなが一つとな
って学力の向上を目指しています。例えるなら、
みんなはオーケストラの一員！一人一人が欠か
せない音なんです！！と大きく手を振り上げた。
校長が熱く教育方針を語るのを、保護者も子供た
ちも参加者はみな静かに聞き入っている。ちょっ
とオーバーだけど情熱があって、良い校長先生
かな、と感じたが、双子たちは「なんか、怖い…」と
あまり好きではなさそう。



【算数のノート】

全校区学力テストで上位であること、さまざまな
課外授業の様子も写真や資料をスライドで上映し
ながら説明があった。各教科の先生たちも紹介さ
れ、どの先生もきっちりしていて好感が持てた。

1時間ほどで説明会は終わり、双子に「どう思っ
た？」と聞くと、「うん、いろんな勉強ができそうで
いいかな？」と最終的な印象は悪くないようだった。
少々厳しめの学校ではあるが、カリキュラムがし
っかり生まれ、先生の雰囲気も良く、私も夫もなか
なか気に入った。

A校が終わり、次はB校に向かった。B校はマ
ンモス校だけあって校舎も大きく、建物は鉄筋コ
ンクリ建で日本の学校の校舎に似た雰囲気だ。た
だ、外壁に所々落書きがあったり、ものが壊れて
放置されていたり、ガラスに目貼りかしてあったり
と、なんだかちょっとスクールウォーズを思い出
した。校舎前にはもうたくさん家族が待っている。
親も子もみんな大声で話し、子供たちの雰囲気も
ちょっと「悪ガキ風」である。なんや、この違い…。

しばらく、ぼーっと騒いでいる家族を観察してい
たが、ようやく受付が始まり、それぞれグループの
番号を言い渡された。講堂での全体説明があっ
た後、グループに分かれて教室見学ができるの
だという。各教室では、それぞれの教科の先生と
有志の生徒が説明と模擬授業をしてくれるよう
だ。

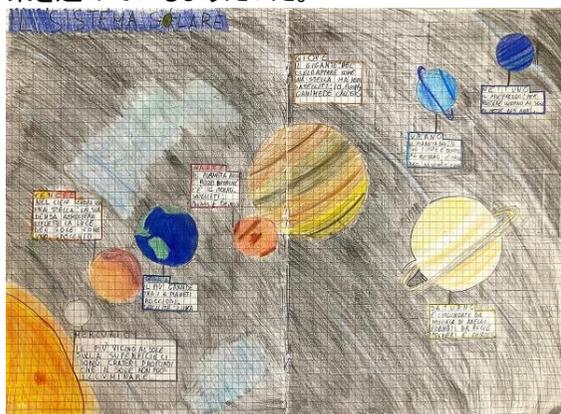
講堂に入ると、人数を考えてなかったのか椅子
は全く足りず、ぎゅうぎゅう詰めで、子供たちは地
べたに座った。親たちは知り合いを見つけてはギ
ャアギャアとおしゃべりし「ええい！静かにせ
い！！」と叫びたいくらい、ものすごくうるさい。双
子は同じクラスの子も参加しているので、楽しそう
にしている。「なんかもう、今すぐ帰りたいんやけ
ど…」と夫に言うと、「まだまだ、これからだよ。こ
の学校の本当の姿は…」と言われた。しばらくす
ると「皆さーん、静かに〜」と、そこら辺の買い物
帰りおばさんが舞台上に上がってきたのかと思っ
ていたら「はい、私、校長です！」と元気に挨拶を始
めた。「私たちは、皆が卒業できることを目指し、
落ちこぼれる生徒が出ないよう、日々やる気を持
たせるようがんばっています！！」と声を張り上
げた。卒業が第一目標なんや…。横にいる夫を見
ると、なんとも言えない複雑な表情をしている。
「楽しみを見つけ、学校に通い続ける、それが一
番大切です！楽しみはなんでもいいのです！」楽
しみはなんでもいいって、言い切るんや。あかん、
スクールウォーズの場面がチラつく…。校長から
の説明はさっさと終了し、若い男性の先生が生徒
とともに舞台上に上がった。「学校の音楽クラブのみ
んなです、拍手をお願いします！！！」と言うと、
じゃじゃ〜〜んとギター音が響いた。「わー
ー！きゃーー！」と子供達の歓声が上がリ、
照明が暗くなった。演奏が始まり、黒いチューブ
トップとパジャマみたいなズボンを履いたボーカ
ルの女の子が声を張り上げた。保護者も一緒に歌
い大合唱であった。何曲か歌を披露した後、よう
やく説明会というかロックコンサートは終わり、グ
ループごとの見学が行われた。

各教科ごとに分けられた教室で、担当の先生
が教科の説明をし、在校生徒たちが、参加した子
供達にどのように授業をしているか模擬授業をし
てくれる。おそらくこの学校の優秀な子供たちを
かき集めたのだろう、比較的眞面目そうでおとな
しい生徒たちである。

私たちが入った教室は「国語(イタリア語)」であ
った。国語の先生が皆に挨拶し「さて、中学と高校

で学ぶ、重要な文学作品はなんでしょう？はい、あなた！」といきなり参加者の母親を指名する先生。「え・・“I promessi sposi”(いいなづけ)？」と驚きつつ母親は答えた。「そうです！ではそこのお父さん、作者は誰ですか？」父親が「・・Alessandro Manzoni (アレッサンドロ・マンゾーニ)」と答えた。保護者に聞くんや・・生徒に聞かへんのか。「素晴らしい！そうです、保護者の方も中学、特に高校でしっかりと学んだはずです。しかし文法が難しく、現代の子供たちには理解しづらいのです。ですので！」と生徒の方を振り向き「私たちは現代風の劇の台本にして、少しずつこの物語を勉強します！」と言う。ん？それは、ちょっと違うんちゃう？だってこれはイタリアを代表する古典文学で、原文通り学ぶのが勉強ではないのか・・。「では、劇を披露します！」と先生の号令で、生徒監修・演出の寸劇“I promessi sposi”が始まった。まあ、それはそれはチープな茶番に仕立て上げられていて、セリフも「超ムカつくんだよ、お前！」「ありえ～ん」「まじムリ」みたいな若者語になっており、ああ、マンゾーニも草葉の影で泣いてるだろ・・、という仕上がりになっていた。

しかし生徒たちは楽しそうに生き生きと演技をして楽しんでた。B校では生徒のやる気を出させるために、生徒のやりたいことを取り入れて授業を進めているようだった。



【理科のノート】

A校、B校それぞれ特徴があり、なかなか興味深いオープンスクールであった。双子はB校のエンターテイメント感溢れる見学会の虜になり、予想通り「B校に行きたい！」と言ったが、オープンスクールを終えた私と夫の判断はA校だった。双子に説明すると「やっぱり・・、うん、わかった！」と半ば予想していたようで、中学進学はA校となった。

双子の小学校生活も、残り2ヶ月。9月から入学するA校に双子が馴染めるかの心配よりも「また、あのクラスママチャットに入らなければならないのだろうか・・」という事の方が、外国人母の一番の悩みである。

(当館元受講生)

＜「イタリア語よもやま話」セミナー＞

イタリア語は音楽的な美しい響きをもつ魅力的な言語で、そのいくつかの言葉はいろんな分野で遠く離れた日本の私たちの生活にも入り込んでいるほど、とても親しみを感じる外国語のひとつと言えますが、こと話が文法となると、名詞の性・数、冠詞に前置詞、複雑多岐にわたる動詞の活用・時制・叙法など、修得するには高い壁が立ちほだかり、その壁を乗り越えるには多くの努力と時間が必要です。この講座では、文法書や会話教則本との日頃のそうした格闘をひと時忘れて、新たな学習意欲アップにつながるような、生きたイタリア語にまつわる面白くてちょっと意外な話をいくつかご紹介します。

- ・講師：立元 義弘(当館理事)
- ・日程：2025年5月24日(土)10:30～12:30
- ・場所：日本イタリア会館 京都本校
- ・受講料：
 - 京都土曜日イタリア語クラスの受講生 無料
 - 上記以外のクラスの受講生 2,000円
 - 個人維持会員の方 1,000円
 - 一般の方 2,000円

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
 〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
 TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
 E-mail: centro@italiakaikan.jp
 URL: <http://italiakaikan.jp/>